

1910 年代から 1960 年代の日本における 赤ちゃんコンクールの興隆と終焉

——乳幼児健診の普及過程にみられる 子どもへのまなざしの変容——

高木 雅史

はじめに

本論文では、『読売新聞』『毎日新聞』『朝日新聞』と厚生省広報誌である『厚生広報』（1953年4月発刊、厚生大臣官房総務課広報係編）の記事を主な資料として、1910年代に開催されるようになった赤ちゃんコンクール¹⁾が、戦後になって厚生省・読売新聞社主催のイベントが登場するなどして興隆し、1960年代に終焉を迎える経緯をたどる。以下に述べていくように、50年余りにわたって開催された赤ちゃんコンクールは、優良とされた子どもやその親たちへの表彰から子ども全体に対する健康診査（以下、健診と表記）の普及へという母子保健施策の展開過程の性格を、象徴的に示すものであった。そしてそれは、母子保健施策を進めようとする厚生省や各地方自治体といった行政だけでなく、民間団体や企業も巻き込み、何よりも自らの育児に熱心な親たちの応募・参加に支えられて取り組まれたイベントであった。

本論文は、赤ちゃんコンクールの盛衰の経緯をたどることによって、母子保健施策にみられた子どもへのまなざしの変容過程の特徴を明らかにすることを目的としている。

赤ちゃんコンクールに関する先行研究には、大正自由教育の新学校として有名な私立帝国小学校（西山哲治校長）における1913年からの赤ん坊展覧会と、大阪児童愛護聯盟（後に日本児童愛護聯盟）による1924年の大阪開催から始まる乳幼児審査会（初回の名称は「赤んぼう審査会」）についてのものがある。

前者について小山静子は、大正期において欧米諸国と比較して乳児死亡率が格段に高いという国家的危機感を基盤として、「第二国民」と称された子どもの健全育成という国家的关心と子どもの成長に対する個々の家庭の关心とが結びついたところで、民間において実施された取り組みが西山による赤ん坊展覧会であったと分析している²⁾。小山は、「西山の意図と同じように、コンクールを行うことによって、育児知識や衛生思想の普及」をめざす赤ちゃんコンクールが、1920年代には各地で開催されるようになっていたことも明らかにしている。また、木下比呂美は、設立趣意書にあるように帝国小学校は「中流以上の子弟」を対象としており、その学校が開催する赤ちゃんコンクールは、子どもの教育に多大な关心を有した「新中間層の母親の間に、強い支持基盤を見出した」と指摘している³⁾。

山下大厚は、赤ん坊展覧会には「国家の将来の人口を問題にしながら、母親の身体と私的な家庭の内部が、乳幼児の身体と育児を通じて点検と管理の対象とされる過程」⁴⁾が観測されると分析している。

後者については、茂木潤が大阪児童愛護聯盟発行の機関誌『子供の世紀』（1923年～1944年）を主な資料として分析し、東京での乳幼児審査会については1925年から1955年の第22回までの開催が判明しているとしている。茂木はこの審査会の開催動向を3つの時期に区分し、第1期（1925年～1934年）の内容と特徴を詳細に明らかにしている⁵⁾。

和田典子は、1921年に大阪児童愛護聯盟が設立に至る経緯、乳幼児審査会の内容や特徴について、劣悪な状態にあった大阪市の乳幼児保護の実

態を踏まえて詳細に明らかにしている。乳児死亡率の軽減対策として必要とされた健診と育児相談の普及に果たした役割を高く評価し、大阪児童愛護聯盟による乳幼児審査会（「赤んぼう審査会」）を乳幼児健診の起源であると位置づけている⁶⁾。

いずれの研究も、戦前期、特に大正期における取り組みの分析が中心となっている。それがどのように戦後に継承されたのか、どのような理由により終焉を迎えることになったのかについては検討されていない。赤ちゃんコンクールに関する歴史的経緯は、大局的に捉えれば山下が指摘するように、誕生や死亡率、健康の水準といった「人口の調整」のために、個人の身体に介入し、規律・管理しようとするフーコー流のビオ＝ポリティック（bio-politique／人口の生－政治学）に位置づけることができるであろう⁷⁾。戦前の赤ちゃんコンクールに、ビオ＝ポリティックとしての権力の発動をみると異論はない。それでは次なる課題として、それが終焉を迎えたということの意味はどのように理解したらよいのだろうか。

以下に述べていくように、赤ちゃんコンクールによる優良とされた子どもやその親たちへの表彰を1つの契機としつつ乳幼児健診が普及していく過程は、順接的・直線的に進行したものではなかった。赤ちゃんコンクールは母子保健施策の進展にむしろ貢献しないものと意味づけられて終焉し、その問題点を克服する取り組みとして乳幼児健診のさらなる普及が図られていくのである。赤ちゃんコンクールの終焉は、母子保健施策における新たな段階の登場を意味し、それは今日にもつながる特徴をはらむものであったと考える。

以上の問題意識から、本論文は、日本における乳幼児健診の普及過程の特徴や意味、さらにそこにみられる子どもへのまなざしの変容を知るために、特に赤ちゃんコンクールが終焉することになった経緯や理由に焦点づけて検討を行う。

1. 戦前における赤ちゃんコンクールの開始

(1) 私立帝国小学校主催の赤ん坊展覧会

帝国小学校主催の赤ん坊展覧会に関しては、『読売新聞』には管見の限り、1913年の第1回に関する記事はなく、最初の掲載は翌年10月25日開催の第2回において1等を獲得した子どもの母親の談話である⁸⁾。赤ん坊展覧会は、東京市巣鴨町にあった私立帝国小学校を会場に毎年10月に開催された。1915年の第3回では申込者が230名に達し、東京や横浜からの応募が多かったという⁹⁾。この日の様子を伝える『読売新聞』の記事には「昨年と異り一歳未満のものから募集」したとあるので、それ以前は1歳以上の子どもも対象としていたようである。また、「昨年は保育上の事を訊いても母が多くを語らなかった故参考になる点が少かったので今年は具体的に十ヶ條の質問をするとの事ですから此結果は育児上有益な教訓を得るであります」とあり、この展覧会の目的は育児上有益な教訓を得ることであったことが確認できる。

当日は、小児科医や助手数名により、体重や胸囲等の測定が行われ、最も体重があった子どもが「第一番当選になるであらう」と記事にあることから、体格の大きさが主要な審査基準であったことが分かる¹⁰⁾。父親の職業別参加者数は、商人95、会社員38、官吏21、医者13、教員9、軍人8、雑誌記者6、美術家5、労働者4、無職業42であり、農林水産業がないことから、都市新中間層からの参加者たちが中心であったことも裏づけられる。なお、当日には児童研究で有名な高島平三郎や小児科医の三田谷啓¹¹⁾、順天堂大学医師の金原為春らが参観していたという。この第3回では、48名が入選となった¹²⁾。

校長の西山哲治は、この赤ん坊展覧会について開始から5年間の経験を『赤ん坊の研究』(南北社出版部、1918年)という著作にまとめている。その出版後も継続して開催されており、『読売新聞』の記事からは、第5回

(1917年)以降、第10回(もしくは第11回・1924年)、第12回(1925年)、第13回(1926年)の開催が確認できる¹³⁾。

(2) 大阪児童愛護聯盟・日本児童愛護聯盟主催の乳幼児審査会

1924年9月に、「大阪こども研究会大阪児童愛護聯盟」主催の「あかんば審査会」が開催されたことが、『読売新聞』の記事から確認できる¹⁴⁾。これ以後、6月(あるいは7月)と9月の年2回、開催されていたようである。1924年では9月22日から24日までの3日間、大阪の三越呉服店を会場に、3000名を超える申込者のうち先着1500名に対して、体重、身長、胸囲、頭囲などを審査した。さらに「係り医員が表を作り尚玩具を見せて子供の表情を見たり、五色の木片の中から其の好きな色を取らせたり数の観念や音に至るまで所謂あかんばのメンタルテストとも云ふべき試み」も行われた。1925年9月では、母親に対しての「メンタルテスト」も実施された¹⁵⁾。翌年7月には、満2歳以下とされていた審査対象の子ども数は2500名に増やされ、会期も5日間となった¹⁶⁾。

その後、『読売新聞』では関係記事が一時途絶えるが、1933年6月になって広告欄に「日本児童愛護聯盟(東京・大阪)」主催、内務省・文部省が協賛の「全東京乳幼児審査会」についての募集広告が登場する¹⁷⁾。東京でも開催されるようになるなかで、聯盟の名称も「大阪」から「日本」に変更されたことが分かる¹⁸⁾。この募集広告には「森永ドライミルク」の文字・イラストが描かれており、森永乳業がスポンサーとなって掲載されたものであったことが見てとれる。東京ではこの年、6月23日から28日まで、日本橋三越新館で開催された。「第五回全東京乳幼児審査会規定」によれば、鳩山一郎文部大臣が総裁であり、会長は廣井辰太郎(東洋大学教授)、顧問には富士川游、下田次郎、倉橋惣三、巖谷小波、高島平三郎、賀川豊彦などそうそうたるメンバーが名を連ねている。審査方法は、体重、身長、胸囲、頭囲等の測定、栄養、体质の鑑定、母親に対する哺育事項の

質問であった。但し書きとして「授乳、其他栄養などのことをお尋ねして参考に致したい」とあり、授乳状況などについての情報収集という意図もあったことをうかがい知ることができる。

1934年6月19日には、日本橋高島屋に場所を移し、日本児童愛護聯盟主催「皇太子殿下御誕記念赤ちゃん審査会」が開催された。後援にはそれまでの内務省、文部省に加えて拓務省も加わった¹⁹⁾。

なお、同年9月1日から3日まで、日本橋高島屋主催、読売新聞社後援の「海国赤ちゃん入選写真展覧会」が初めて開催され、応募写真から選抜された「勇ましい海国赤ちゃんの、ほゝゑましい入選写真」の陳列展覧が行われている²⁰⁾。この審査員には日本児童愛護聯盟主事の伊藤悌二が加わっていた。応募総数700点余りから1歳から4歳まで各3名が当選し、入選270点の写真が陳列展示されたのである²¹⁾。

その後、しばらく記事は途絶えるが、1938年に至って「第十回全東京赤ちゃん審査会」に関する記事が『読売新聞』に掲載されている。日本児童愛護聯盟主催は変わらないが、恩賜財團愛育会、中央社会事業協会、東京優良児母の会が後援、協賛は内務省、文部省、拓務省に加えて陸軍省、海軍省、厚生省も名を連ねた²²⁾。各種団体の後援や協賛というかたちでの国家の支持も得て、人気を博していたことをうかがい知ることができる。

なお、管見の限り『読売新聞』においては、1940年6月に第12回を迎えた日本児童愛護聯盟主催の東京乳幼児審査会に対して、初めて「赤ちゃんコンクール」という用語が使用された²³⁾。その後、戦時体制下の1943年の第15回をもって、いったん途絶えることになったのである。

(3) 弊害や問題点の指摘

1940年5月の『読売新聞』には、「興亜の子を護れ！」の叫びとともに、この頃赤ちゃん審査会の開催が一つの社会的な流行現象となったやうです」と評する記事が掲載されており、赤ちゃんコンクールの戦前における

最盛期は1940年頃であったようである²⁴⁾。しかしその一方、この記事では赤ちゃんコンクールの弊害や問題点が、次のように指摘されている。まず応募者に関しては、「審査会であればもう夢中に赤ちゃんを連れて飛びこむ」「この子はよく肥って立派だからといふ名誉心だけで審査会巡りをする」という親たちの態度が問題視されている。主催者側に関しては、事業化が進められるなかで狭い場所にたくさんの子どもを集めてしまったり、衛生状態が良くなかったりしており、何よりも優良児の表彰が親たちの射幸心を煽るものであってはならないという、砂田恵一（赤十字病院乳児部）の指摘を掲載している。砂田によれば、赤ちゃんコンクールの目的は育児知識の啓発にあり、問題が多く発生する離乳期にある人工栄養（コナミルク）の子どものみを集めるのが望ましいと提言している。さらに、「早産児にしては発育がよい」「貴い乳や人工栄養で苦心して育てた」などの、母親の努力を表彰すべきであると述べている²⁵⁾。

2. 戦後における赤ちゃんコンクールの興隆

（1）厚生省・読売新聞社主催の全日本赤ちゃん集団コンクール

戦後になって、厚生省は1949年度から赤ちゃんコンクールを開催するようになった。このことについて『厚生省五十年史』には、「毎年五月五日の子どもの日に全国の健康優良な乳児について中央表彰が行われ、乳幼児の保健指導に大きな効果を上げた」²⁶⁾と記されている。

この引用にあるように、このコンクールは、国民の祝日である「子供の日」の制定を記念して、厚生省と読売新聞社が主催したイベントであり、日本児童栄養協会と日本乳製品協会が協賛として関わった²⁷⁾。

『読売新聞』の記事によれば、1940年春に、育嬰会が主催で、読売新聞社と厚生省が後援した「育児展覧会及び赤ちゃん審査会」が、上野松坂屋で開催されている²⁸⁾。詳細は不明であるが、戦後、厚生省が読売新聞社と

ともに赤ちゃんコンクールを主催することになったのは、この戦前の経験を踏まえてのことであったのかも知れない。

戦後に開催されるようになったイベントの正式名称は、全日本赤ちゃん集団コンクールであり、中央表彰の会場は日比谷公会堂であった。このコンクールに併せて「乳児発育の最も優秀なる府県並びに模範的な乳児指導を行っている市区町村」をねぎらうため、全日本模範愛育市区町村表彰が5月5日に東京と各府県において挙行された²⁹⁾。

このコンクールの手続き・仕組みは以下のとおりである。

地方表彰の選択方法

イ、各保健所単位にその担当区域内に於ける廿三年三月生れの乳児中最も発育良好なる男女各十名（計廿名）の健康調査を行い診査表を府県に提出せしめる

ロ、各保健所はその管内の乳児保健指導に熱意あり且つ乳児死亡率の最も低い市区町村一ヶ所を選定府県に報告する

地方表彰

各府県の最優良乳児廿名の表彰は五月五日「子供の日」を期し各府県庁に於て知事並に本社より表彰する

中央表彰の選択方法

厚生省は各府県の提出資料を厳密に調査の上中央審査委員の審査を受け最も良好な乳児集団を有する府県から入賞者を選出、府県単位に一位二位三位を決定すると共に最優秀模範愛育市区町村三ヶ所を選定する

中央表彰

入賞府県代表として第一位は男女各二名、第二位、第三位は男女各一名宛計八名を付添一名（主として母）と共に東京に招き五月五日日